

実践報告 英語の授業での映画利用法（その2）

堀内 ちとせ

<目的>

英語が専門でなく、それほど得意でもない学生に対して、授業の中で英語の映画を用いることによって英語への関心を高め、少しでも彼らの学習意欲の向上を図る。

<対象学生>

藤田保健衛生大学 衛生学部 衛生技術学科1年 78名（1998年度）
衛生看護学科1年 49名（1998年度）

<授業を始める前に>（授業で用いる練習問題作り）

- ①映画「ホーム・アローン」（日本語字幕付き）を10分ぐらいの長さに区切り、10のパートを作る。
- ②区切ったそれぞれのパートから、比較的聞き取りやすく覚えておくと便利そうな表現（いずれも1文）を4つつ選び出す。
- ③選び出した表現それぞれについて、その表現を構成している単語の最初のアルファベット、音声的補助記号 etc. を与えたヒント・シート（資料1参照）を作る。

資料1 <ヒント・シート例>

C ● you c ● h ● an(d) h () me? ↗

「●」: 音節（強勢の置かれる音節は「●」で表す）

(): 弱めに発音される子音

∪ : 音のつながり

↗ : イントネーション（上昇）

- ④聞き取らせる表現およびその表現に関連した穴埋め問題、さらにその問題の解答を載せた音声的補助記号付き正解シート（資料2）を作る。

資料2 <正解例>

● ● ● ● ●
Can ∪ you come here an(d) hel(p) me? ↗

<穴埋め問題&解答例>

宿題手伝ってもらえる?
C ● you h ● me with my h ● ?

（ここまでを提示して穴埋めをさせ答えを言わせたあと、以下を提示する。）

● ● ● ● ● ● ● ●
Can ∪ you hel(p) me wi(th) my homewor(k)? ↗

- ⑤ 1つ前のパートの後半部分5分と次の部分10分の計約15分を録画した後に、選び出した表現（できるだけその表現のみ）を6回ずつ録画した編集ビデオ・テープを作る。

＜授業の進め方＞（英語の映画を使った部分のみ）

- ①聞き取る表現の日本語訳提示：授業が始まる前にその日聞き取る予定の表現（4つすべて）の日本語訳（極力意識を避けたもの）をホワイト・ボードに書いておく。
- ②前回の復習およびパートの視聴：チャイムが鳴り終わると同時に前回聞き取った表現が6回連続して録画してある部分を流し、その後、ホワイト・ボードに日本語で書かれている表現に注意させながら、その日のパート（日本語字幕付き）を視聴させる。
- ③聞き取る表現の推測：ホワイト・ボードに書かれているその日の表現の日本語訳をもとに英語を推測させる。文にならない場合は、使われているだろう単語だけでも推測させ書かせる。
- ④表現の聞き取り
- (1) ヒントなしで3回：表現が出てきている状況、きっかけ、意味内容 etc. を簡単に説明した後、ヒント・シートなしで3回映画音声を聞かせる。その時、何か聞こえた単語があればメモさせる。
- (2) ヒントありで2・3回：資料提示装置でヒント・シートを提示しながら、さらに2回映画音声を聞かせる。必要であるようなら、日本人教員が少しゆっくり発音して聞かせる。
- ⑤解答確認：すぐに学生を当て答えを言わせた後、資料提示装置で聞き取らせた表現を提示しながら、その表現の日本語内容、どのような場合に使われる表現なのか等を言って聞かせる。その後、もう1回その表現の映画音声を聞かせる。最後に日本人教員の後について1・2回発音練習させる。
- ⑥穴埋め問題：聞き取った表現に関連した穴埋め問題を1・2題行う。すぐに学生を当て答えを言わせ、資料提示装置で正解を提示する。その後、正解を日本人教員の後について1・2回発音練習させる。

以上③～⑥までを4回（1回に聞き取る表現が4つあるため）繰り返す。

＜今回の試みに対する反省＞（学生へのアンケートをもとに）

- ①パート視聴前の日本語訳提示について

パート視聴前にその日に聞き取る表現の日本語訳をあらかじめ与えておいたことについて、「意識してみた」および「必要」と答えている学生がほとんど（90%/86%）であった。聞き取る表現の日本語訳が知らされることは、「目安になって良かった」と何人かの学生もコメントしている。今後も続けて行っていく価値がありそうである。

＜パート視聴前の日本語訳＞（今年度初めての試み）

| | | | |
|-----------|-----|-------|-----|
| 意識して見た | 90% | 必要 | 86% |
| 意識して見なかった | 5% | 不必要 | 4% |
| 分からない | 5% | 分からない | 10% |

②前回の表現のリピートについて

表現の聞き取りのために録画した部分(それぞれ6回ずつ)を、復習のために流してみた。少し回数が多かったためか「必要」としている学生は過半数にこそ至らなかった(43%)が、思惑通り「復習になるので良かった」とコメントしている学生も多かった。もう少し回数を減らす必要はあるかもしれない。

＜前回の表現のリピート＞(今年度初めての試み)

| | |
|-------|-----|
| 必要 | 43% |
| 不必要 | 32% |
| 分からない | 25% |

③ひとつのパートの長さおよび1回に聞き取る表現について

前回の後半部分5分と新しい部分10分、計15分というパートの長さについて、過半数の学生(56%)が「ちょうど良い」と答えている。が、前年度の試みのときと同様、「短い」と答えている学生が3分の1以上(40%)も見られる。そうはいても、やはり映画鑑賞会ではない限り、せいぜい15分ぐらいが限界のように思われる。

また、1回に聞き取る表現を前年度より1つ減らして4つとしてみたところ、ほとんどの学生(92%)が「ちょうど良い」と答えている。4つぐらいで適当と言えるだろう。

＜ひとつのパートの長さ＞

＜1回に聞き取る表現の数＞

| | (10分・前年度) (15分・今年度) | | (5つ・前年度) (4つ・今年度) | |
|--------|---------------------|-----|-------------------|---------|
| 長い | 3% | 1% | 多い | 27% 2% |
| ちょうど良い | 57% | 56% | ちょうど良い | 66% 92% |
| 短い | 33% | 40% | 少ない | 2% 2% |
| 分からない | 7% | 3% | 分からない | 5% 4% |

④聞き取り前の表現の推測について

聞き取る前に日本語訳をもとにして表現を推測させることは、過半数を切る学生(42%)しかその価値を認めていないようである。これは、英語が苦手な学生が多いため、最初の時点で何も書けない学生が多いことも原因と言えるかもしれない。しかし、数はどうであれ「必要」としている学生がいる限り、引き続き行っていくだけのことはあるように思われる。

＜聞き取り前の表現の推測＞(今年度初めての試み)

| | | | |
|--------|-----|-------|-----|
| 試みた | 67% | 必要 | 42% |
| 試みなかった | 28% | 不必要 | 12% |
| 忘れた | 5% | 分からない | 46% |

⑤ヒント・シートにおける音声的補助記号について

今年度は音声的補助記号の説明を前年度以上に積極的に行ってみたところ、音のつながり、および弱めの子音の表示に関してはほぼ前年通りの学生(54%)が「必要」としているのに対して、音節数の表示の方は昨年度を多く上回り、3分の1ほどの学生(28%)が「必要」と答えている。記号がただの記号となってしまうように、十分に説明は行わなければならないようである。

また、今年度は強勢の置かれる音節をも表示してみた(資料2参照)のだが、こちらの方は「音のつながり」(54%)以上の学生(60%)から「必要」との答えを得た。強勢の置かれる音

節を示すためにも音節の表示は欠かせないと言えるだろう。

| | 〈単語間の音のつながりと弱めの子音の表示〉 | | 〈音節の表示〉 | |
|-------|-----------------------|-------|---------|---------|
| | (前年度) | (今年度) | (前年度) | (今年度) |
| 必要 | 53% | 54% | 必要 | 9% 28% |
| 不必要 | 20% | 11% | 不必要 | 59% 25% |
| 分からない | 27% | 35% | 分からない | 32% 47% |

〈強勢のおかれる音節の表示〉 (今年度初めての試み)

| | |
|-------|-----|
| 必要 | 60% |
| 不必要 | 13% |
| 分からない | 27% |

⑥正解シートにおける音声的補助記号について

ヒント・シートの時と同様、記号の説明を積極的に行った結果、前年度(12%)より音節の表示を「必要」とする学生(37%)が増えている。また全体的に見て、音声的補助記号はヒント・シートよりも正解シートで用いた方が、「必要」と答える学生が多い(54%/72%, 28%/37%, 60%/69%)ようである。発音練習で実際に声を出す機会があるためだろう。

| | 〈単語間の音のつながりと弱めの子音の表示〉 | | 〈音節の表示〉 | |
|-------|-----------------------|-------|---------|---------|
| | (前年度) | (今年度) | (前年度) | (今年度) |
| 必要 | 61% | 72% | 必要 | 12% 37% |
| 不必要 | 12% | 6% | 不必要 | 49% 24% |
| 分からない | 27% | 22% | 分からない | 39% 39% |

〈単語間の音のつながりと弱めの子音の表示〉

| | (ヒント) | (正解) |
|-------|-------|------|
| 必要 | 54% | 72% |
| 不必要 | 11% | 6% |
| 分からない | 35% | 22% |

〈音節の表示〉

| | (ヒント) | (正解) |
|-------|-------|------|
| 必要 | 28% | 37% |
| 不必要 | 25% | 24% |
| 分からない | 47% | 39% |

〈強勢の置かれる音節の表示〉 (今年度初めての試み)

| | (ヒント) | (正解) |
|-------|-------|------|
| 必要 | 60% | 69% |
| 不必要 | 13% | 11% |
| 分からない | 27% | 20% |

⑦穴埋め問題について

聞き取った表現に関連した穴埋め問題については、前年度実施した応用表現(部分的に語句を置きかえたもの etc.) の紹介を大きく上回って「必要」と答えている学生(71%)が見られた。が、今回の穴埋め問題は、まさにその表現をもう一度入れさせるような極めて簡単なものが多かったため、「同じものを入れるだけなら、なくてもいい」とコメントしている学生も見られた。問題形式を見直す必要はありそうである。

<応用表現 (前年度) / 穴埋め問題 (今年度)>

| | (前年度) | (今年度) |
|-------|-------|-------|
| 必要 | 47% | 71% |
| 不必要 | 16% | 13% |
| 分からない | 37% | 16% |

⑧発音練習について

聞き取った表現および穴埋め問題の答えの発音練習については、ほとんどの学生(それぞれ88%, 75%)が「必要」だとしている。回数こそ少なくとも(今回1・2回)、発音練習はした方が良いと言えるだろう。

<聞き取った表現の発音練習>

| | |
|-------|-----|
| 必要 | 88% |
| 不必要 | 2% |
| 分からない | 10% |

<穴埋め問題の答えの発音練習>

| | |
|-------|-----|
| 必要 | 75% |
| 不必要 | 9% |
| 分からない | 16% |

<学生自身の変化> (学生へのアンケートをもとに)

今回のアンケートでは英語の音声に「慣れてきた」と答えている学生がやや少な目(36%)ではあったが、前年と同様、半数近くの学生(48%)が英語に耳を傾けようという気持ちは「強まった」と答えている。また、英語の映画を見る機会および英語の音声自体に耳を傾ける機会については、前年度を大きく上回る学生(22%/44%, 16%/47%)が「増えた」としている。

実際アンケートでは、映画を使って英語を勉強してみようという気持ちが「出てきた」と答えている学生も、過半数には至らない(40%)が多く見られた。また、英語そのものが「好きになった」としている学生さえも、わずかではある(18%)が見られた。

ダイエットと同じで、英語の能力そのものを身につけるのには、かなりの時間と労力がかかるのが常である。しかし、英語の映画の魅力を借りて学生の英語への関心を高め、英語の映画ひいては英語そのものに触れる機会を増やしてやることであれば、もう少し簡単に実現可能なのではないだろうか。そして、そうしてやることは、間接的にはあるが学生の英語能力を高める糸口となってくれるのではないだろうか。

<英語の音声>

| | (前年度) | (今年度) |
|----------|-------|-------|
| 慣れてきた | 41% | 36% |
| 元々聞くのは得意 | 4% | 9% |
| 元々聞くのは苦手 | 26% | 28% |
| 分からない | 29% | 27% |

<英語に耳を傾けようという気持ち>

| | (前年度) | (今年度) |
|-------|-------|-------|
| 強まった | 48% | 48% |
| 元々ある | 22% | 31% |
| 元々ない | 8% | 8% |
| 弱まった | 2% | 0% |
| 分からない | 20% | 13% |

<英語の映画を見る機会>

| | (前年度) | (今年度) |
|-------|-------|-------|
| 増えた | 22% | 44% |
| 元々ある | 39% | 28% |
| 元々ない | 25% | 9% |
| 減った | 1% | 12% |
| 分からない | 13% | 7% |

<英語に耳を傾ける機会>

| | (前年度) | (今年度) |
|-------|-------|-------|
| 増えた | 16% | 47% |
| 元々ある | 29% | 19% |
| 元々ない | 29% | 18% |
| 減った | 1% | 6% |
| 分からない | 25% | 10% |

<映画で英語を勉強してみようという気持ち>

| | |
|-------|-----|
| 出たきた | 40% |
| 元々ある | 21% |
| 元々ない | 21% |
| 減った | 1% |
| 分からない | 17% |

<英語に対する気持ち>

| | |
|--------|-----|
| 好きになった | 18% |
| 元々好き | 34% |
| 元々嫌い | 19% |
| 嫌いになった | 1% |
| 分からない | 28% |

<終わりに>

そもそも映画とは娯楽を目的に作られたものである。そのため、それをを用いて効果的に英語の能力を高めていくことは、なかなか難しいことなのかもしれない。しかし、そんな映画も、もともと英語が苦手だったり、関心のないような学生の気を引く手段としては、最高の産物といえるのではないだろうか。今教えている学生を見ても、学生の多くが「英語は嫌い、でも映画は好き」だと答えている。そんな学生たちに対して、授業のほんの1部であっても彼らの大好きな映画にさいてやる（授業時間内に「ただ見せる」という形だけは極力さけたいものであるが）ことによって、少しでも彼らの英語への興味を奮い立たせてやるのが可能なのである。

効果的な授業を施してやることは、もちろん大切なことだろう。しかし、それも英語への関心のない学生に対してでは、何の効果も上がらない恐れがある。まずは学生自身の意識を高めてやることこそ、効果的な英語学習への第1歩ではないだろうか。好きにさえなれば、興味さえ沸いてくれば、誰から何と言われなくとも、学生自らもっと英語に触れようとするはずである。そして、どんな形であっても英語に日々触れ続けることこそが、英語能力の向上へとつながっていくものと信じている。